

『古代アメリカ』20, 2017, pp.41-56

<論文 特集>

2つで1つ

— アンデスにおける対になったモノの時空間的広がり の検討 —

土井正樹
(山形大学)

【要旨】

「アンデス的なもの」を意味するロ・アンディーノ (*lo andino*) といわれるものの要件の1つとして、一般に伝統文化と称されるような、一定の時間的連続性と空間的広がりを有することが挙げられる。本論では、具体的に特定の文化要素の時間的連続性と空間的広がりを検討することにより、その文化要素がロ・アンディーノとしての要件を満たすものであるのか否かを検証する。そのために本論で取り上げるのが、2つ一組として製作され使用されたと考えられるモノである。2つ一組として製作されたと考えられるモノとして、インカ帝国期のアキリヤ(*aquilla*)およびケーロ(*quero*)と呼ばれるコップ形容器が知られているが、近年他の時期にも、そのような容器が存在することが報告されている。そこで、この対になったモノに注目し、まずはモノそれ自体として、次に対になったモノに関わる概念、そして最後にそれら対になったモノの機能や社会的意味において、時間的連続性と空間的広がりが認められるのか否かを検討する。

【キーワード】

アンデス、ロ・アンディーノ、対になったモノ、ヤナンティン、双胴土器

【目次】

1. はじめに
 2. 対になったモノ
 3. ヤナンティン
 4. 対になったモノと双胴土器
 5. 対になったモノの使用法
 6. おわりに
-

1. はじめに

現在のペルーを中心とし、エクアドルとボリビアの一部を含む地域は、中央アンデス地域（以下単にアンデスと記述）と呼ばれ、いわゆるアンデス文明が展開した舞台として知られる^(註1)。この地域に共通して認められる特有の文化が、「アンデス的なもの」という意味でロ・アンディーノ (*lo andino*) と呼ばれる。ロ・アンディーノとして着目されてきたものは、言語、服装や環境利用の形態など多岐にわたるが、比較的長期にわたり連続性が認められる文化要素であることが、ロ・アンディーノの要件の1つとなっている [cf. Beaulé 2016: 2; Painter 1991: 95-96]。同様に、アンデスという比較的広大な地域の文化的特徴を代表するという意味で、アンデスという空間において一定の広がりを示す文化要素であることもその要件となろう。このように、ロ・アンディーノとしての要件を文化要素の時間的連続性と空間的広がりとして規定した上で、そのような要件を満たすモノが存在するの否かを具体的に検討することが本論の目的である。

ロ・アンディーノに関する研究は、本質主義的であると批判を受けることがある^(註2)。しかしその一方で、特定の時期や空間を超越して認められる文化要素の存在が、完全に否定できるわけではない。そこでまず本論では、そのような可能性を有する事例の一つとして2つ一組で製作され、使用されたと考えられる対になったモノに注目し、そのアンデスにおける時間的、空間的広がりを検討する。対になったモノとしては、後述するインカ帝国期のアキリヤ(*Aquilla*)とケーロ(*Quero*)が知られている。しかし近年、調査の進展と共に新たな資料が蓄積されつつあり、その時間的、空間的広がりを確認しておく必要がある。

次に、それら対になったモノを表す概念に注目し、民族誌を参照することにより、物質的に連続性が認められる対になったモノの間に、概念的な関連性が存在するの否かを検討する。続いて、対になったモノとは外見が異なるが、同じ概念を表象している可能性のある双胴土器に注目し、対になっている土器が表象する概念のさらなる連続性や広がりの可能性を探究する。最後に、対になった土器の社会的意味や役割における連続性に関する手がかりを得ることを目的とし、土器の使用法について考察する。

なお本論では、日本人研究者によって一般に使用されている編年にしたがって、紀元1年から紀元600年を地方発展期、紀元600年から紀元1000年までをワリ期、紀元1500年頃から紀元1532年までをインカ帝国期、そして1532年から1821年までを植民地期と呼ぶ(cf. 国本 2001; 関 2017: 表序-1)。

2. 対になったモノ

対になったモノとしてはどのようなモノがあり、それらはどの時期に、どの地域に存在していたのであろうか。本節では、先行研究およびアヤクチュ州でのフィールドワークから得られた資料に基づき、それらの点を検討する。ただし、本節の目的は対になったモノの種類、時期、地域を網羅的に示すことではなく、対になったモノのアンデスにおける時空間的な広がりが、限定されたものであるのか、それともある程度の広がりをもって存在していたの否かを検討することにある。そのためここで取り上げる資料としては、この目的を達成するために必要最低限の、現在筆者が知りうる代表的な事例のみとする。

2-1. 先行研究

インカ帝国期のアキリヤおよびケーロと呼ばれるコップ形の容器は、対になって製作され使用されたことが知られている [カミンズ 2012:219; ガルシラーソ・デ・ラ・ペーガ 2006[1609]:130-131]。アキリヤとケーロは

器形としては共通性が認められるが、素材によって区別されている。アキリャは金製もしくは銀製で、ケーロは木製または土製である^(註3)。

Thomas Cummins は、2つ一組となった金製のアキリャの姿を図版で示している [Cummins 2002:Fig.1.2]。また、対になった木製もしくは土製のケーロの姿も Flores Ochoa らが編纂した図録中に確認することができる [Flores Ochoa et al. 1998:pp.15-19]。それらの2つ一組になったアキリャやケーロは互いに同一であるように見えるが、わずかな違いが存在する。そのような違いとして一般的であるのは器の大きさである。また、器の大きさがほとんど変わらない場合は、文様の描かれる大きさに違いが認められる。

インカ帝国期の対になった土器は、コップ形土器に限られるわけではない。ペルー南高地クスコ州のマチュピチュ遺跡からは、その他の器種の対になった土器が報告されている。2つの把手の付いた広口壺は、そのような対になったもののひとつである [Burger and Salazar 2004:Cat. No. 38]。この対になった2つの土器は、全体の大きさも、描かれている装飾もほとんど同じであるが、器高がやや異なり、また装飾の描かれ方では器高の低い方が高いものよりもやや洗練されている。人の頭部を象った把手の付いた皿も2つ一組となっている [Burger and Salazar 2004:Cat. No. 47]。皿の片方の方がやや大きく、その全体の色調も白っぽい。また、カオリン粘土製の皿も対になっている [Burger and Salazar 2004:Cat. No. 49]。この対となった2つの皿はよく似ているが、やはり一方の皿の方がやや大きい。2つの把手が付いた、蝶の図案が描かれた皿も対になっており、2つの皿によく似た装飾が施されているが、やはり大きさにわずかな違いが認められる [Burger and Salazar 2004:Cat. No. 50]。同様に、2つ一組となったものとしてアルパカを象った皿がある [Burger and Salazar 2004:Cat. No. 51]。この対となった2つの皿も、大きさがやや異なっている。

インカ帝国期の事例は、対になった土器や金属製容器の存在を明確に示している。基本的には対になった2つの容器は互によく似ているものの、両者の間にわずかな違いが存在する点が注目される。ただし、インカの実例に認められる差違は、後述するワリ期のケーロ形土器やモチェ文化の象形土器と比較すると微妙であり、そのような差違を意図的なものととらえるのか、それとも手作りによる誤差ととらえるべきか、判断することは難しい。

時代をさかのぼり、ワリ期にも同様の対になった土器が存在する。ペルー北高地、カハマルカ州のエル・パラシオ遺跡の調査により、アキリャやケーロと似た器形の土器が、2つ一組となってワリ期にも存在することが明らかとなった [渡部 2017]。この遺跡からは、全部で15個のケーロ形の土器が出土している。それら15個のケーロ形土器のうち、対となる土器を欠く1個を除き、すべてのケーロ形土器を装飾上の特徴に基づき7組のペアとして分類することができる [渡部 2017: 80-84]。対となるケーロ形土器は高い類似性を示しているが、装飾や器形にわずかな差異が認められる [渡部 2017: 80]。例えば渡部が第1ペアと呼ぶ2個のケーロ形土器は、両方とも胴部上方に周囲より盛り上がった帯状部を有するほかには装飾要素はないが、底部の形と全体の大きさが異なっている [渡部 2017:図 4a,4b]。ケーロ形土器第3ペアでは、帯状に隆起した部分上を上下するジグザグ文様が認められるが、片方ではジグザグは二重刻線により表現されているが、もう片方では一本の刻線で表現されている [渡部 2017:図 6a, 6b]。さらに、このジグザグ文により帯状隆起部は上向きと下向きの三角形が交互に並ぶ空間となっているが、二重刻線の土器の方は下向きの三角形内を、一重刻線の土器の方は上向きの三角形の空間に刺突文が施されている [渡部 2017:図 6a, 6b]。この第3ペアの例は、対になった土器の間で意図的に差異化が図られていたことを示している点で注目される。エル・パラシオ遺跡のケーロ形土器は、その器形と対になって存在しているという状況が、インカ帝国期のアキリャやケーロとの共通性を示している。

さらに、ワリ期の前の地方発展期のモチェ文化にも対になった土器が存在する。それは、長方形の台座の上

に神的存在と子どもを背負った女性が立体的に表現されたものである [Quilter 2011:plate 22]。神的存在の背には円錐形の容器が付属しており、この土器が単なる立体像ではなく杯としての機能を有していたことを示唆している。

この対になった土器も、全体的には類似しているものの、細部は異なっている。その違いは、1cm の器高の違い、神的存在と子どもを背負った女性の間隔の違い、女性の衣服の文様における圏点文と円文様の違い、そして子どもの背に描かれた線の、黒と白という色の違いに表れている。このモチエ文化の土器の事例も、ワリ期のケーロ形土器同様に、対になった類似した土器の間での差異化が意図的に図られていたと考えられる。

2-2. アヤクーチョの新資料

上述した先行研究で示されている事例に加え、ペルー中央高地南部のアヤクーチョ州でのフィールドワークにより対になった土器に関する新たな資料が得られた。ここでは、それらの事例について述べる。

2-2.1) トリゴパンパ村周辺遺跡から出土した土器

ワンカ・ハサ遺跡とクルス・パタ遺跡は、アヤクーチョ谷の中央、アヤクーチョ盆地とワンタ盆地の中間のトリゴパンパ村の中に位置している [土井 2015:図3]。ワンカ・ハサ遺跡では、2002年に第1次発掘調査を、2015年に第2次発掘調査を実施した (図1)。クルス・パタ遺跡では、2003年に発掘調査を実施した。出土した土器の分析から、ワンカ・ハサ遺跡は地方発展期とワリ期に、クルス・パタ遺跡はワリ期に利用されていた

ことがわかっている。これらの調査により、2つ一組として製作されたと考えられる土器が出土した。以下、それらの土器について述べる。

最初にワンカ・ハサ遺跡の、地方発展期のコンテキストから出土した土器について説明する。この遺跡からは、リヤマの頭部を模した土器が少なくとも2個体、R-8と名付けた部屋の埋土中から出土した [土井 2015:図5]。それら2つの土器はよく似ており、1個体は半完形土器として復元することができたが (図2)、もう1個体のほうは、リヤマの耳から後頭部にかけての部位に相当する部分のみが復元可能であった (図3)。両者の間には高い類似性が認められ、かつ、現在までに確認されている同様の土器はこの2点のみであるため、それらは2つ一組として製作された土器であったと思われる。

同様に、この遺跡から出土したシカ形土器も、対になった土器であったと考えられる。シカ形土器のうちの一つについては、器全体

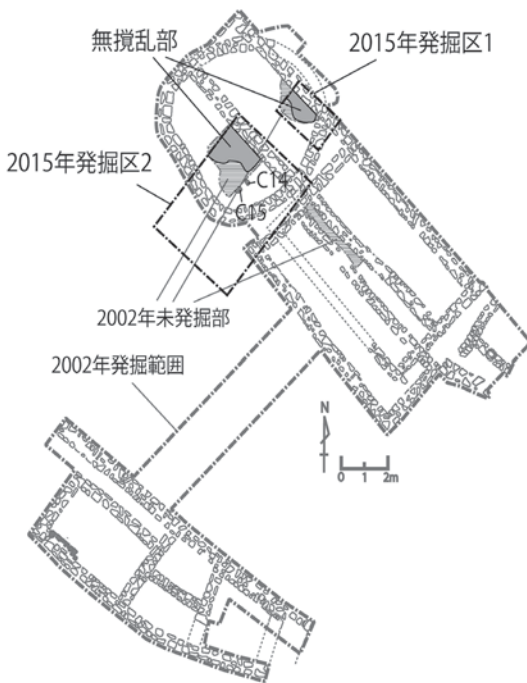


図1 ワンカ・ハサ遺跡第1次(2002年)、第2次(2015年)調査範囲



図2 半完形リヤマ型土器



図3 リヤマ形土器後頭部



図4 シカ形土器

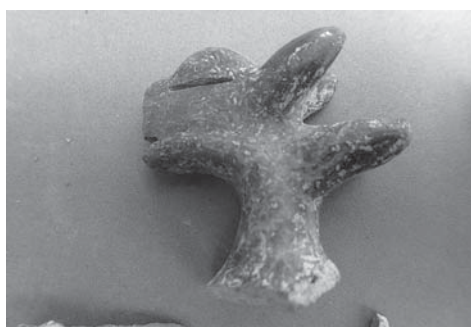


図5 シカ形土器頭部



図6 杯破片

の7割ほどを復元することができた(図4)。この土器の特徴は器としての主体部に、シカの頭部と頸部を模した部分が付属していることである。このシカの頭部を模した部分は、これまでの調査によりもう1つ出土している^(註4)(図5)。この頭部の類似性から、少なくとも同じようなシカ形土器が2個体存在したことは確実である。

2つ一組となっていた可能性がある別の土器は、杯形土器である。それは胴部中央のやや下方にくびれをもつ、一般にゴブレットと呼ばれる器形をしている[土井 2015:図 12]。この土器は完形として復元することはできなかったが、くびれ部分は完全に一周するように復元することができた。この杯のくびれより上の部分には、中央の二重圏点文を中心とし、そこから鋭角に折れ曲がった4本の腕状の付加物が四方にのびる図像が描かれている。出土品の中には、接合することができなかったものの、これと同じ器形、同じ文様を有する土器の一部であったと考えられる土器片も含まれていた(図6)。それらの破片の中には、杯のくびれ部分が含まれており、復元した杯とは別に、少なくとも一つは類似した杯が存在していたことは明白である。したがって、この杯も2つ一組となっていた可能性がある。

これらの土器に加え、人面を模した土器も対となっていた可能性がある。第1次発掘調査では、数タイプの人面土器が出土したが、そのうちの1つが部屋R-8の内部のC15から出土したものである[土井 2015:図 5]。これは器全体として人面を表現したものであり、閉じた目、鼻の中心を通過して顎まで伸びている1本の黒線、そして髪を表現している額から後頭部に欠けての黒塗りが特徴である(図7)。この土器と類似した土器の一部と考えられる土器片も出土している。それらは、閉じた目、後頭部、そして鼻と口という三つの部位に相当する

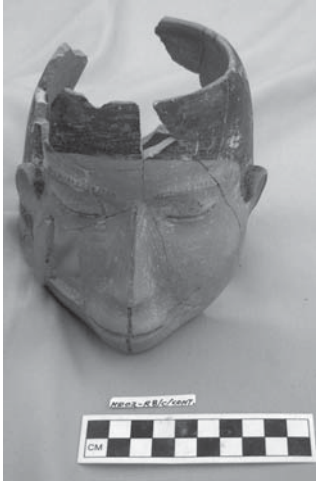


図7 人面土器

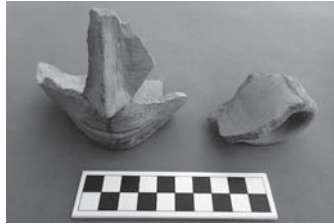


図8 人面土器 a(上), 人面土器 b(下)



図9 対となった短頸壺

(図 8a, b)。残念ながら第2次調査の出土遺物に関しては未だに十分な分析を行っていないため、これら3つの部位が同一の土器に由来するものであるか否かは確認できていない。しかし、少なくとも2つの類似した人面土器が存在していたことは間違いないであろう。したがって、これらの人面土器が2つ一組として存在していた可能性も否定できない。

上述したワンカ・ハサ遺跡から出土した土器は、資料が断片的であるため、それらすべてが対となって存在していたと断言することは難しい。しかし、どれも独自性の強い特徴的な土器であり、これまでのところ、上述した対となっていたと考えられる土器以外に類似した土器は確認できていない。したがって、それらが2つ一組として存在していた可能性は十分にある。ただし、ワンカ・ハサ遺跡から出土した資料では、対となる土器の全体像を比較することができないため、それらの間に、先行研究の検討によって認められたような微妙な差異が存在したのかを知ることはできない。

ワリ期に利用されていたクルス・パタ遺跡からは、全体像の比較が可能な対となった土器が出土した。それらは、2つの短頸壺である(図9)。それら2つの土器は破片となった状態で検出され、土器片の全てがちょうど収まる程度の小さな穴の中で見つかったものである。その状況は、それら2つの土器を意図的に割って埋めるという、埋納が行われたことを示唆していた。

2つの短頸壺は無文であったが、器面調整及び胎土は、ワリ期の土器の特徴を示している。2つの短頸壺はよく似ているが大きさがやや異なる。また焼成による外面の色調も異なっており、小さい方が明るいベージュ色を呈しているのに対し、大きい方は暗いベージュあるいは茶色を呈している。土器片が埋まっていた穴からは、この2つの土器以外は出土しておらず、2つ一組となった土器が埋納されたものであると考えられる。

2-2.2) その他の遺跡の事例

対になっていたと考えられる土器や土製品は、アヤクーチョ市周辺の他の遺跡からの出土品にも認められる。その中の一つが建物を象った建築土器である。対になった建築土器は、現在はワリ遺跡内の博物館に展示されているが、これまで詳しい報告はなされていない(図10、図11)。出土地や出土状況は不明であるが、装飾上の特徴からそれらはワリ期のオクロス様式の土器であると判断できる。それらの建築土器は、ペルー文化省ア

ヤクーチョ地方支局(DDC Ayacucho)に2つ一緒に持ちこまれたものであることから、一緒に出土したものであると思われる。この対になった土器はよく似ているが、実際にはわずかな違いが存在する。最初に気づくのは土器外面の色の違いである。一方の土器には、外面全体に濃いオレンジ色のスリップが施されているが、もう一方の土器には、薄いオレンジ色のスリップが施されていた。

それ以外の点では、2つの土器はよく似ている。全体的な器形も類似しており、両者ともに注口付き土器であったと考えられる^(註5)。

土器上面に存在する上部の建築の表現も共通する部分が多く、そこには円形の建物と矩形の建物がそれぞれ向かい合って建つ様子が表現されている。濃いオレンジ色の土器ではこの建築を表現した部分の残存状態がよく、向かい合って建つ計四つの建物は壁によって連結されており、その結果中庭を取り囲む矩形の建築複合となっている。薄いオレンジ色の土器では、円形の建物はその土台部分を残すのみであるが、濃いオレンジ色の土器同様に、矩形建築と円形建築が向かい合って建ち、濃いオレンジ色の土器同様にそれら建造物の間は壁によって連結されていた痕跡が残る。

これら2つの土器の装飾もよく似ているが、一部にわずかな違いがみられる。両者の器の外面には、三角形をした空間内に2つのH形をした図像が白を背景として描かれている。さらに、この三角形の空間を囲むように、黒線で縁取られた紫、赤、スリップ色の帯状の線が虹のように重なった線として表現されている。残りの良い部分では、そのような帯状の線の本数は、濃いオレンジ色の土器では5本であるのに対し、薄いオレンジ色の土器では6本となっていることが確認できる。

建物の細部も、一部に違いが認められる。土器上面の矩形の建物には入り口が2つあり、それらの入り口部分の左右には対称的な図像が描かれている。入り口左側にはアルファベットの「E」字状の文様が、入り口右側にはそれを反転させたカタカナの「ヨ」の字状の文様が描かれている。薄いオレンジ色の土器では、これら「E」および「ヨ」の字状の文様の横棒の数が1本多い箇所がある。

コンチョパタ遺跡から出土した建造物象形土製品も、2つ一組のものであった可能性がある。この建造物象形土製品は、前述の土器同様に建造物を表現したものであるが、器としての機能を有していない点異なる。それは、William H. Isbellによるコンチョパタ遺跡の発掘調査で出土した。もともと墓の副葬品であったと考えられ [Isbell 2000:33-34]、現在は復元されてアヤクーチョ州アヤクーチョ市の国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学に保管されている [Ochatoma y Cabrera 2010: Fig.5a-Fig.6]。この土製品は、ワリ文化特有の、内部が基盤の目状に仕切られた矩形建築を表現している。復元を担当した Carlos Mancilla Rojasによれば、この復元された土製品のほかに、別個体としての同様の建造物を表現した土製品の一部であると考えられる破片が存在するという。ただし、この別個体と考えられるものに関しては、その一部と考えられる破片が存在するのみで、

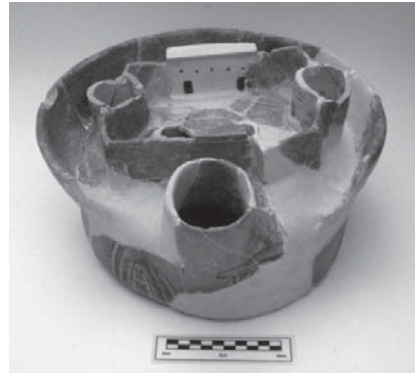


図10 建築土器(濃いオレンジスリップ)

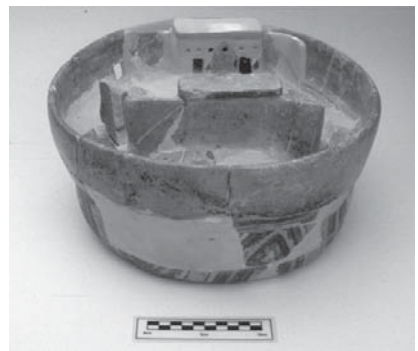


図11 建築土器(薄いオレンジスリップ)

その全体像を復元できないということであった〔Carlos Mancilla Rojas 私信 2017年6月〕。そのため、両者の類似性や差異を検討することはできないが、この建築象形土製品も2つ一組となっていた可能性がある。

2-3. 対になったモノの時空間的広がり

本節で検討した事例からは、対になったモノがアンデスの特定の時期や地域を超えて存在したことが分かる。アキリヤ、ケーロそしてマチュピチュ遺跡の遺物の事例は、インカ帝国期に、エル・パラシオ遺跡とクルス・パタ遺跡の事例はワリ期に、ワンカ・ハサ遺跡とモチエ文化の事例は地方発展期に、対となったモノが存在したことを示している。同時に、マチュピチュ遺跡の事例はペルー南高地、ワンカ・ハサ遺跡、クルス・パタ遺跡の事例はペルー中央高地南部、エル・パラシオ遺跡の事例はペルー北高地、そしてモチエ文化の事例はペルー北海岸といった地域に、対となったモノが存在していたことを意味している。

マチュピチュ遺跡とアヤクーチョ州の資料は、対になって存在するモノの多様性も示していた。すでに述べたように、対になったモノとしてはインカ帝国期のアキリヤやケーロというコップ形容器が知られていたが、上記の検討によりその他の器種にも対になったものが存在していたことは明白である。さらに、アヤクーチョ州の事例は、容器としての機能を有さない土製品も対になって存在していた可能性を示唆している。

これまでの検討により、対になったモノがアンデスにおいて時間的にも空間的にもある程度の普遍性をもって存在していたことが明らかになった。しかし、対になったモノの中には、インカ帝国期の事例のように、対になるモノの間の違いがあまり認められないものと、ワリ期やモチエ文化の事例のように対になるモノ同士が意図的に差別化されていたと考えられるモノが存在していた。ここで問題となるのは、それらを対になったモノとしてひとくりに扱うことができるのかという点である。

3. ヤナンティン

対になったモノの組み合わせとして、ほぼ対称をなすモノの組み合わせと差違のあるモノの組み合わせが存在した。そのような大まかに2種類の組み合わせのある、対になったモノの背景にある概念に関する興味深い分析を行っているのが Tristan Platt [1986] である。

Platt は、ボリビアのポトシ地域北部のマチャ(Macha)社会が、上半分と下半分を意味するアランサヤ(Aransaya)とウリンサヤ(Urinsaya)という2つの集団に分かれていたことを報告している。さらにその2集団がいかに統合されていたのかに関し、ヤナンティン (yanantin) というケチュア語の単語の意味に注目した分析を行っている [Platt 1986]。このヤナンティンという言葉は、カミンズが対になったアキリヤとケーロの関係を示す言葉として言及しており [カミンズ 2012:219]、対になったモノとも深く関わる。

Platt [1986] が示すマチャの神話や世界観はアランサヤ/ウリンサヤの関係がそれぞれ上/下、男/女、右/左という二項対立的な関係と象徴的に結び付いていることを示唆している。このような対立構造は、現実の両者の関係に明確に表れている。マチャのアランサヤとウリンサヤは内婚の単位となっており、婚姻を通じた両集団の結びつきは認められない。さらに両集団は、儀礼的戦い(tinkus)や土地をめぐる争いの場面で対立する関係にあり、儀礼的戦いでは両者の対立により死者が出ることもある。そこで問題となるのは、このように鋭く対立するアランサヤとウリンサヤがマチャとしていかに統合されているのかという点である。Platt は、マチャの人々が、対になったものや二度ずつ行う行為に対し用いるヤナンティンという言葉の意味に注目することにより、この対立的な2つの集団が矛盾なく一つの集団として統合される原理を明らかにした。

マチャでは大地に対する献酒が行われる際には、受け取り手となる神の名を呼びながら数滴の酒の雫を大地に垂らすという行いが2度なされる。儀礼の参加者にココアの葉を配布するときも、2握りずつ儀礼の参加者に渡し、両手に1つずつ持った計2つのコップで受け取る。結婚式では、対になった「雄牛鉢」^(註6)が大地へ献酒する時に用いられるが、この対になった「雄牛鉢」の代わりに2つの鉢が中空の管でつながったもの^(註7)が使用されることもある。これら全ての行為やモノがヤナンティンとして説明される。また、人間の目や耳もヤナンティンであるという [Platt 1986: 245]。マチャの人々のこのようなヤナンティンという言葉の使用状況からは、それが、2つ揃っていることが自然、あるいは当然であるような関係に対し用いられる言葉であると同時に、目や耳が身体において示す、対称的な2つ一組の関係を含意していることが推測される。しかしこの言葉は、結婚している男女に対して、すなわち非対照的な関係にある2つのものの組み合わせに対しても用いられる。

Platt [1986: 248-252] は、対称的な2つの存在の結びつきと非対称的な2つの存在の結びつきの両方を指すヤナンティンという言葉の概念的齟齬を解決するために、植民地期初期に別々に編纂された3冊のケチュア語辞書を利用し、ヤナンティンという語とその関連語彙の意味を検討した^(註8)。ヤナンティンと関連する語に注目すると、パクタ・プーラ (*pacta pura*) という言葉と同義であり、その語根であるパクタとは他の存在との完全な一致を意味する。その一方で、同じ語幹を含むパクタチャニ (*pactachani*) は、同等ではない2つの存在を対にするという意味を表し、上述したように同等なモノの組み合わせを意味するヤナンティンの概念とは矛盾する。しかしこの矛盾は、さらなる関連語の検討により解消される。パクタリヤニはクスカチャニ (*cuzcachani*) またはクスカチニ (*cuzcachini*) という語と同義であり、この3つの語は「何かを対にする」という意味と「水平にする」という意味を有する [Platt 1986: 250-251]。そこでPlatt はヤナンティンと関連するこれら3つの言葉は、「対にする」ということが「平らでなかった面を均すことにより、ぴったりと合わせるようにする」とこととして認識されていたのではないかと推測している [Platt 1986: 251]。その傍証として彼は、クスカという語幹と、「平らなモノ」を意味するパンパ (*pampa*) という語幹が同義であることを挙げている [Platt 1986: 250]。ヤナンティンとは、対称性を示す2つの存在の結びつきを示す一方で、2つの存在間の対称的な関係を保持するために、非対称的な2つの存在間の不均衡を是正することも含意しているようである。このように考えることによって、互いに異質な存在としての男/女の関係や、対立するアランサヤとウリンサヤの関係がヤナンティンとして認識されていることを理解することが可能となる。

ケチュア語であるヤナンティンの概念が、アンデスにおいて空間的、時間的にどれほど普遍的であるのかという問題は残るが、Platt [1986] の考えに従うのであれば、対称的な2つのモノから成る組み合わせも、差違のある2つのモノから成る組み合わせもヤナンティンとしての状態にある。したがって、概念的には、地方発展期、ワリ期、インカ帝国期の対になったモノの間に関連性を認めることができる。また、空間的広がりという観点からも、ペルーの北海岸、北高地、中央高地、南高地に存在した対になったモノの間に関連性が想定できる。したがって、異なる時期、異なる地域の間に対となったものの間に概念的な連続性が存在したと考えることが可能である。

さらに、マチャの結婚式で用いられる器である対になった「雄牛鉢」は、対になったアキリヤやケーロと同様の対になったモノであり、2つの鉢が中空の管で結ばれ一体となった容器は、胴部が短い中空の管を介してつながった双胴土器との類似性が高い。このことは、対になった容器と双胴土器が概念上置換可能なモノとしてお互いに関連していることを示すだけでなく、それらが共にヤナンティンを具現化したものである可能性も示している。

4. 対になったモノと双胴土器の共通性

前項では、対になったモノの特定の時期や地域を超えたつながりを検討し、それらの間の関連性を明らかにした。ここでは、対になったモノと結び付いたヤナンティン概念のさらなる広がりや、対になったモノと双胴土器との関係の検討を通じて明らかにしたい。

これまで見てきた対になったモノの事例では、2つの独立した器が対をなしていたが、双胴土器は、それら対になったモノとの共通性を示す。対になった土器と双胴土器との関連性は、1つの対を構成する2つの土器が結び付いているという特徴だけではなく、上述したように民族誌での対になった土器と双胴土器の使用法の共通性にも表れている。

ワンカ・ハサ遺跡から出土したワルバ文化の土器は、やや口のすぼまったコップ形の2つの容器がつながったものである(図12)。上部の橋状部と胴部下方の筒状部を介して2つのコップ形土器が連結されている。筒状部の内部は空洞になっているため、片方のコップ形容器に液体を注ぐと、もう片方のコップ形容器のほうにもその液体が流れていく構造となっている。

この土器と同様に2つのコップ形土器が連結した形のワルバ文化の双胴土器は、文化省アヤクーチョ地方支局の博物館にも所蔵されている。また同じ博物館に、2つの独立した広口壺が胴部で連結された形態のワリ期の双胴土器も所蔵されている(図13)。

これら双胴土器に共通するのは、連結された2つの器の間の対称性であり、同一ともいえる2つの器が連結されている点である。これらの器に液体が注がれた場合、その液体は連結部を通過して双方の器の間を行き来することが可能である。双胴土器は2つの容器の間の同等な結びつきを示すものであり、ほぼ同じ2つの器によって構成される対になった土器の間のつながりをより直接的に表現したものであると考えることも可能であろう。



図12 ワルバ文化の双胴土器



図13 ワリ期の双胴土器

このような双胴土器は、地方発展期のナスカ文化にも存在する。リマ美術館が発行した図録では、漁師、魚、男女を表現した双胴土器が確認できる[Pardo y Fux eds. 2017]。それらの中で、魚を表現した双胴土器は、胴部が管状部によって結び付いた二匹の魚を主体部とし、各魚の背からそれぞれほぼ垂直に注口が伸び、それら二本の注口の間が橋状部によってつながった双注口土器となっている[Pardo y Fux eds. 2017:Cat.41]。それは、全体として対等な2つの要素の結びつきを示したものとなっている。それに対し、漁師を表現した2つの球形鉢から成る双胴土器は、大きさと装飾の異なる2つの球形鉢が胴部でつながったものである[Pardo y Fux eds. 2017:Cat.32]。ここでは結び付いた2つの要素は対等ではなく、二人の漁師を表現した土器の間には明確な差異が認められる。男女を表現した双胴土器も同様に、異質な2つの要素の結びつきを示している[Pardo y Fux eds. 2017:Cat.68]。それは、2つのボトル状の容器が胴部と橋状部で結び付いた双注口土器であり、2つのボトル状部分がそれぞれ、クリーム

色で肌の色が表現された女性と褐色で肌の色が表現された男性となっている。

本項での検討により、対になった土器と双胴土器の共通性を確認することができた。対になった2つのモノの関係には、対等なものとの差違が認められるものがあるが、同じ特徴が双胴土器にも認められた。前述の「雄牛鉢」と中空の管で胴部がつながった双胴容器の置換可能性も考慮するのであれば、対になったモノと双胴土器は、見た目は大きく異なるが、それらが表象していたヤナンティンとしての関係は同じであったかも知れない。仮に対になった土器と双胴土器が同じ概念を表象しているという考えが正しいとすると、ヤナンティン概念の歴史的連続性と空間的広がりをはっきりとさせるためには、対になった土器だけでなく双胴土器の存在も考慮し、それらがどの時期に、どの場所に存在するのか、より広い視野から検討する必要がある。

5. 対になったモノの使用法

対になったモノの継続性を検討するために、これまで主にモノ自体に焦点を当ててきたが、対になったモノが各時期、各地域において同じ意味、同じ役割を果たしていたのかを知るための手がかりとなるのがその使用方法である。対になったモノにおいて、物質的な特徴に加えその使用方法にも特定の時期や地域を超えて共通性が認められるのであれば、それらが有していた社会的意味や役割が共通していた可能性がある。現時点では対になったモノに関して得られる情報が限られており、全ての対になったモノの使用状況を明らかにすることは難しい。そこで、クロニカの記述から比較的詳細な情報を得ることができるインカ帝国期の事例を検討することにより、対になったモノの使用法に関する手がかりを得たい。

インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベータは、インカ帝国の人々は身分に応じた1対の杯をもっており、一個人が保有する2つ一組となる杯は、同じ大きさ、同じ形、そして同じ素材で作られる必要があったと述べている [ガルシラーソ・デ・ラ・ベータ 2006[1609]: 130-131]。ガルシラーソ・デ・ラ・ベータは、飲酒で使用されるアキリヤヤケーロが同じ素材で製作された1対であるのは、それらの杯を使用して酒を酌み交わす人々の間の平等性を意識してのことであると述べている [ガルシラーソ・デ・ラ・ベータ 2006[1609]: 131]。

そのようにして製作されたアキリヤヤケーロは、飲酒の場面で使用されることにより、異なる集団、異なる身分の人々をつなぐ役割を果たした。たとえばインカ帝国の首都であるクスコは、ハナン・クスコとウリン・クスコに二分されていたが、カミンズは、「儀礼の義務として参列者が2個一組のコップを持参し、次々にトウモロコシ酒を酌み交わすことで、この区分すべてとそれらの間の統合が認識された」と述べている [カミンズ 2012: 217]。これは、対になったケーロを使用して儀礼の場で酒を酌み交わすことにより、二分された集団が1つに統合されていたことを意味している。アキリヤまたはケーロを使用して酒を酌み交わすことが、酒を酌み交わす2人の人物の間に友好的な関係を生み出すことは、年代記者である Juan de Betanzos も言及している (Betanzos 1987[1551]: 72-73) ^(註9)。

上記のクロニカの記述からは、対になった容器の製作と使用に関する重要な情報を引き出すことができる。対になったアキリヤヤケーロが同じ素材から製作されなければならなかったのは、ガルシラーソ・デ・ラ・ベータが述べているように対になった容器の間の平等性が意識されていたからだけではなく、カミンズが推測しているように、対になった容器が概念的にだけでなく、物質的にも結び付いている必要があったからであると考えられる [カミンズ 2012: 219]。インカ帝国期の対になった土器はまさに概念的、物質的につながっていたといえる。このような対になった2つの土器の関係は、前述の、双胴土器が対になった土器同士のつながりをより直接的に示したものであるという考えを支持するものである。

さらに、クロニカの記述は、この対になった土器は個人間や集団間のつながりや統合を生み出すことにも関わっていたことを示している。マチャの事例から判断するならば、おそらくインカ帝国期の個人間、および集団間の関係もヤナンティンとして認識されていたと推測でき、対になったモノは、そのような関係を具体的に示すという機能を果たしていた可能性もある^(註10)。

インカ帝国期のアキリヤとケーロの使用法は、ワリ期のケーロ形土器の使用法や意味を考えるうえで、大変示唆的である。対になって使用されたことが想定される上、器形上の共通性の高いワリ期のケーロ形土器がインカ帝国期のアキリヤとケーロと同様の機能を果たしていた可能性は十分にある。さらに、アキリヤやケーロ同様に酒杯としての機能を有していたと考えられるモチエ文化の対になった土器やワンカ・ハサ遺跡出土のゴブレット形の杯も、同様の役割を果たしていた可能性がある。今後それらアキリヤやケーロとの共通性を示す対になった土器の使用法を明らかにすることで、対になったモノのうち、飲酒に関わる器についてはその社会的な意味や役割も含めた歴史的継続性を検証することができるであろう。

5. おわりに

特定の時期や地域を超越したロ・アンディーノへの視線は、本質主義批判が浸透した今日のアンデス研究において、多様な問題をはらんでいる。ある地域において、広くかつ長期にわたり変わらず継続しているように見える事物が存在していたとしても、各時期、各地域のコンテキストによってその意味が異なっていることがありうる〔たとえば Painter 1991〕。特定の歴史的・地域的コンテキストの中で事物を解釈し、細部の違いにも注意を払う必要があるという主張には同意する〔本特集の松本論文を参照〕。

しかしその一方で、一定の地理的空間において、文化の継承性が認められることも、否定できないであろう。そのため本論では、アンデスの対になったモノを取り上げ、時空間における分布を検討した。その結果、対になったモノが歴史的には少なくとも地方発展期、ワリ期、インカ帝国期に存在することが確認できた。地理的にも、それらがペルー北海岸、北高地、中央高地、南高地に存在していた可能性が明らかとなった。また、民族誌を参照することにより、対になったモノの関係はヤナンティンの概念でとらえることができ、それによって異なる時期、異なる地域に存在する対になったモノを概念的につなげるものとしてとらえることができた。続く対になった土器と双胴土器の共通性の検討により、双胴土器もヤナンティン概念を視覚化したものである可能性が判明した。このことは、ヤナンティン概念が、時間的にも空間的にも対になった土器の分布を超えて存在しうることを示唆しており、ヤナンティン概念と関わるアンデスの文化伝統を考えるためには、対になった土器だけではなく、双胴土器も考察対象に加える必要があることを意味していた。さらに、クロニカの記述に基づく対になったモノの使用法に関する検討からは、インカ帝国期のアキリヤやケーロが有していた社会的役割がワリ期、さらには地方発展期にまでさかのぼることができる可能性が浮上した。

今後は資料数を増やすことはもちろんであるが、取り上げた事例の細部にも注目し、時期や地域による差違も明らかにする必要がある。マチュピチュ遺跡の事例やアヤクーチョ州の事例は、対になったモノのなかにも多様性があることを示しており、取り上げた全ての事例をインカ帝国期のアキリヤやケーロをモデルとして解釈することは難しいであろう。また、酒杯としてのアキリヤ、ケーロ、ケーロ形土器、台座付円錐土器の間には形態的、使用法的連続性を想定することができるが、その他のモノに関しては、時期や地域によって器種が大きく異なっており、時期や地域毎に異なる機能を果たし、異なる社会的意味を有していた可能性がある。できる限り対になったモノの出土状況を考慮し、その上で、一定の時期や地域を超えた共通性が存在するのかを

問う必要がある。ロ・アンディーノの理念を前提におくのではなく、このような緻密な検討を積み重ねていくことが、地域的特性の理解・把握に繋がっていくであろう。

【謝辞】

本論文に対し、2名の査読者から詳細かつ的確なコメントをいただいた。ここに記し感謝したい。なお、本研究で使用した資料の一部は平成27年度特別研究員奨励費(26・4503)を受けて実施した調査によるものである。

註

- (註1) Gordon Willey が提示した南米の考古学的文化領域のうち、ペルー領域に相当する(Willey 1971: fig. 1-1)。
- (註2) たとえばMichael Painter [1991:96] による批判がある。彼によれば、ジョン・V・ムラがアンデス経済の特徴とした垂直性は、もともとは異なる高度に存在する異なる産物の入手を統御するために、どのように社会が編成されていたのかという点を重視するものであった。しかしながら、環境利用に伴う社会関係を考慮せずに、垂直的な環境利用の存在だけをもって先スペイン期と現代の連続性を主張し、それをロ・アンディーノとして表象するという、本質主義的な他者表象そのものともいえる研究がかつては存在していたという。
- (註3) カミンズはケーロを木製容器に限定しているが [カミンズ 2012:216-17]、本論では、ケーロの形をした土製容器も含めて議論するために、木製のものだけでなく土製のものもケーロと呼ぶ。
- (註4) これら二つのシカ形土器には、4本の角が表現されており、アンデス地域に生息するシカの中でもタルルーカ (*Hippocamelus antisensi*) と呼ばれる種類を表現したものであると考えられる。
- (註5) ただし、保存状態の悪い薄いオレンジ色を呈する土器のほうは、欠損部分を石膏により復元する際に、注口部分が復元されておらず、そのため容器の口となる部分が失われてしまっている。
- (註6) 現地語で *turu wasus* と呼ばれる木製容器である。この容器の内部にはくびきでつながれた二頭の雄牛がその中央に立体的に彫刻されている。
- (註7) この容器の材質は不明である。
- (註8) Platt が依拠しているのは、Fray Domingo de Santo Tomás、Antonio Ricardo、Diego Gonzáles Holguin という3名の辞書編纂者がそれぞれ1560年、1586年、1608年に出版した辞書である。
- (註9) カミンズ [2012:217] は、やはりガルシラーソ・デ・ラ・ペーガの記述に基づき、酒を酌み交わす行為には、対等な立場の2者間の友好関係を構築するだけでなく、地位の違いを表示し確認するという意味があったという解釈も提示している。
- (註10) カミンズ [2012:219-222] も、「ヤナンティンはアンデスの社会的アイデンティティにとってきわめて重要な単語であり概念であって、それがアキリャとケーロの製作という形で具現化されていた」と述べている。

参照文献

Beaule, Christine D.

2016 Lo andino, duality, and indigenous identities in Prehispanic highland Bolivia. *Social Identities*, 1-17.

Betanzos, Juan de

1987 [1551] *Suma y narración de los Incas*. Ediciones Atlas, Madrid.

Burger, R., and L. Salazar

2004 Catalogue. In *Machu Pichu: Unveiling the Mystery of the Incas*, edited by R. Burger, & L. Salazar, pp. 125-217, Yale University Press, New Haven.

Cummins, T.

2002 *Toasts with the Inca*. The University of Michigan Press, Ann Arbor.

カミンズ、トマス

2007 『インカの美術：インカ帝国—研究のフロンティア』 pp. 209-239、東海大学出版会。

土井正樹

2009 「ワルパとナスカ：ワンカ・ハサ遺跡出土土器から見た地域間交流の様相」 『古代アメリカ』 18:1-40。

Flores Ochoa, J., Kuon Arce, E., and Samanez Argumedo, R.

1998 *Queros: Arte Inka en vasos ceremoniales*. Banco de Crédito del Perú, Lima.

ガルシラーソ・デ・ラ・ベールガ、インカ

2007 『インカ皇統記（三）』 岩波書店。

Isbell, W. H.

2000 Repensando el Horizonte Medio: el caso de Conchopata. *Boletín de Arqueología PUCP* 4:9-68.

国本伊代

2007 『改訂新版 概説ラテンアメリカ史』 新評論。

Ochatoma, J., and M. Cabrera

2010 Los espacios de poder y el culto de los ancestros en el Imperio Huari. En *Señores de los Imperios del Sol*, edited by K. Makowski, pp.129-141, Banco de Crédito, Lima.

Painter, M.

1991 Re-Creating the Andean Peasant Economy in Southern Peru. In *Golden Ages, Dark Ages: Imagining the Past in Anthropology and History*, pp.81-106, edited by J. O'Brien, and W. Roseberry, University of California Press, Berkeley.

Pardo, C., and P. Fux eds.

2017 *Nasca*. Asociación Museo de Arte de Lima, Lima.

Platt, T.

1986 Mirrors and Maize: The Concept of Yanantin among the Macha of Bolivia. In *Anthropological History of Andean Politics*, edited by J. Murra, N. Wachtel, and J. Revel, pp.228-259, Cambridge University Press, Cambridge.

Quilter, J.

2011 *The Moche of Ancient Peru: Media and Messages*. Peabody Museum Press, Cambridge.

関雄二

2017 「序章 アンデス文明における権力生成過程の探求」『アンデス文明：神殿から読み取る権力の世界』
(関雄二編) pp.1-23、臨川書店。

渡部森哉

2009 「先スペイン期アンデスのワリ文化の奉納儀礼について：ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の事例」
『年報人類学研究』7:74-91。

Willey, G.

1971 *An Introduction to American Archeology*. Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs.

Two Making a Pair: A Study of Spatiotemporal Spread of Paired Objects in the Andes

Masaki Doi
(Yamagata University)

Keywords: Andes, lo andino, paired objects, yanantin, double bodied vessels

As a requirement of what is said to be “*lo andino*” meaning “Andean-like thing”, it is necessary to have a certain temporal continuity and spatial extent, as commonly referred to as traditional culture. In this paper, I will examine whether the cultural elements satisfy the requirement of “*lo andino*” by specifically examining the temporal continuity and spatial extent of specific cultural elements.

What I will cover in this article is the thing which is considered to have been produced and used as a pair. Cup-shaped containers called “*aquilla*” and “*quero*” in the Inca Empire period are known as things which are considered to be produced as a pair, but in recent years it has been reported that such containers exist at other times as well. Paying attention to this paired thing, first I will discuss the temporal continuity and the spatial extent of the thing itself. Next, I will clarify the relationship between the paired thing and the concept of “*yanantin*” and examine the relationship between the expansion of the concept of “*yanantin*” and the spread of the coupled things related to it. Finally, by examining how to use the paired things, I will consider whether temporal continuity and spatial spread are recognized even at the level of their function and social meaning.

原稿受領日 2017年10月2日
原稿採択決定日 2017年10月31日